

JOHAニュースレター

第42号

日本オーラル・ヒストリー学会第20回大会（JOHA20）のご案内

日本オーラル・ヒストリー学会第20回大会(JOHA20)が 2022年9月10日(土)・11日(日)に立教大学を開催校としてハイブリッド開催されます。お誘い合わせのうえ、ふるってご参加ください。

（目次）

I. 日本オーラル・ヒストリー学会 第 20 回	展開と課題」	· · · 8	
大会			
会長挨拶	· · · 2	第 10 期臨時理事会（2022 年 1 月 23 日）	
開催校挨拶	· · · 2	第 3 回理事会（2022 年 7 月 9 日）	
1. 大会プログラム	· · · 3	III. シンポジウム・ワークショップ報	
2. 自由報告要旨	· · · 5	告	· · · 21
3. 会長企画「JOHA はどこから来て、 どこに向かうのか？」	· · · 7	IV. お知らせ	· · · 22
4. 国際シンポジウム「東アジアにお けるオーラルヒストリー／口述史の		1. 会員異動	
		2. 2022 年度会費納入のお願い	

*ニュースレター掲載のメールアドレスは、(at) 部分を@ に替えて送信してください。

日本オーラル・ヒストリー学会

Japan Oral History Association (JOHA)

I. 日本オーラル・ヒストリー学会 第20回大会

Japan Oral History Association 20th Annual Conference

《会長挨拶》

JOHA も 20 周年を迎えることとなりました。この記念すべき大会を立教大学で行うことができ、大会会場関係者の皆様には深くお礼を申し上げます。ここ 2 年間は残念ながら、オンラインの開催となりましたが、今年は会員の皆様が直接会うことができる大会を予定しています。3 年ぶりになりますが、是非足を運んで頂きたいと思っております。

今回の大会は、二つの記念シンポジウムが行われます。一日目はこれまでの JOHA を振り返る（会長）企画であり、二日目は今後のグローバルな展開にむけた、国際シンポジウムです。20 年の間に培われてきた JOHA 独自の歴史、人脈などを確認でき、今後に繋がる企画となっています。私個人としては、今後の JOHA はより地元地域を大切に、そしてそこに住む人々の声に耳を傾けること、それと同時に、国際的なつながりをより強固にし、互いの声に耳を傾けることが重要だと感じています。JOHA の創生時の想いを確認しつつ、未来に開かれた大会になればと思っています。

JOHA 会長 佐々木てる

《開催校挨拶》

JOHA には立教大学の関係者が多く参加しており、これまで第 8 回大会を池袋キャンパスで、設立 10 周年を記念する第 11 回大会を新座キャンパスで開催してきました。そして、今回の 20 回目の節目にあたる大事な大会を、三たび立教大学（池袋キャンパス）で行うこととなりました。

立教大学が選ばれるのは、都心の大学で、交通の便がよいことが挙げられます。各種設備も整っていますので、コロナ禍での対面とオンラインのハイブリッド開催に関しても何かと使い勝手も良いと思います。

ただし、ハイブリッド開催かつ感染防止対策で受付を縮小するために、オンライン決済を導入することでご不便をおかけします。この点については、この場を借りてお詫びしたいと思います。もっとも対面型での実施を追求するためには必要な手立てということでご理解いただければ幸いです。

なお 2 日目の国際シンポジウムは無料公開ですが、zoom ではなく webex での開催となっております。詳細はメーリングリストおよびホームページで案内しますのでご確認のほどをよろしくお願ひします。設立 10 周年の記念大会から約 10 年が経ったわけですが、今回の大会では海外のオーラル・ヒストリー研究との学問的交流も企画されるなど、研究活動がこの間、飛躍的に高度化・国際化したことがわかります。JOHA の持っている在野性、批判性を大事にしながら、次の 10 年、20 年の足場になるような大会になるはずです。そんな歴史的に画期的な大会を立教大学で開催できることは責任者としての大きな喜びです。

皆様のご参加をお待ちしています。

開催校理事 和田悠

開催日：2022年9月10日（土）・11日（日）

会場：立教大学池袋キャンパス7号館（〒171-8501 東京都豊島区西池袋3-34-1）

開催方法：ハイブリッド（現地開催+Zoomミーティング ※2日目シンポジウムのみwebex使用）

参加費：会員・学生他 1000円 非会員 2000円

対面・オンライン参加にかかわらず、Peatixにて事前にチケットの購入をお願いします。

<https://joha2022conference.peatix.com/> (アカウント作成必須)

購入期限：9月6日（コンビニ/ATMで支払う場合）、9月7日（クレジットカード支払）

＜注意事項＞

- ・2日目シンポジウムは別途申し込みが必要です。申し込み方法は追って学会HPにて告知します。
- ・対面参加の方は、会場受付にてチケット（スマホ画面または印刷したもの）をスタッフにご提示ください。
- ・開催校の入構に制限がかけられており、参加者名簿を事前に提出する必要があることから、当日参加は不可とします。チケット購入者には、後日、入構許可証をpeatixアカウントに登録されたメールアドレスにお送りします。対面で参加される方はスマホに保存するか、印刷したものを携帯してください。
- ・後日、zoomの参加URLをpeatixアカウントに登録されたメールアドレスにお送りします。急遽対面参加できなくなった場合もオンライン参加が可能です。
- ・領収書は原則発行いたしません。利用明細書・引き落とし明細書・コンビニ発行の領収書・peatix発行の領収データなどをご利用ください。

JOHA20 実行委員会：佐々木てる（会長）、和田悠（開催校理事）、佐藤量（学会事務局）、安岡健一（研究活動委員会）、李洪章（会計）

- ・大会に関してご不明な点がございましたら、下記までお問い合わせください。

問合せ先：joha.secretariat@ml.rikkyo.ac.jp

◎ 自由報告者へのお願い

- 1) 自由報告は、報告20分・質疑応答10分（合計30分）で構成されています。
- 2) 配布資料は各自が発表開始時にチャットに配信してください。

会場配布資料ほか詳細は、ハイブリッド開催に伴う確認事項として別途連絡いたします。

1. 大会プログラム

9月10日（土）

9:15 開会 学会長挨拶

9:30～12:15 自由報告部会 一日目

司会：飯倉江里衣（神戸女子大学）

配布資料は会場で配布の他、報告開始時にチャットから送信されます。途中から参加すると受け取れない場合があります。（各報告 20 分・質疑応答 10 分で合計 30 分）

- ・ 王 石諾・三好 恵真子「国際結婚で福島県に嫁いだ中国人女性の「心の揺らぎ」-ライフストーリーから読み解く-」
- ・ 山本 真知子「運動と知——鶴見良行のフィールドワークから考える」
- ・ 岩佐 奈々子「アイヌ民族の人々の「声」を聞くための新しい研究法の開発」
- ・ 加藤 英明「裾野で生きる町工場——設備導入をめぐる人びとの聞き取りをとおして」
- ・ ウォーターズ めぐみ「イギリスにおける Narrative Analysis の展開と貢献：2000 年代以降の諸報告から」

12:15～13:15 昼休憩 理事会

13:15～16:45 会長企画「JOHA はどこから来て、どこに向かうのか？」

司会：大門正克

スピーカー：中尾知代、桜井厚、清水透

コメント：山村淑子、中原逸郎、安岡健一

16:45～17:00 休憩

17:00～ 総会

9月 11 日（日）

9:30～12:00 自由報告部会 二日目

司会：野本京子（東京外国語大学）

- ・ 吉田 静「「好き」を生きる度胸——漁に出づける突棒漁師のライフストーリー」
- ・ 石川 良子「ストリップ劇場のエスノグラフィー」
- ・ 坂井 華海「熊本ラオス友好協会「ラオス遠隔地高校生就学支援事業」被支援者の経験」
- ・ 朱 子奇「番組制作プロダクション・テムジンにおける制作文化の形成と定着--制作者の語りから」
- ・ 藤原 哲也「満鉄鉄道事故者の妻が語る夫の受傷体験と戦後の生活」

12:00～13:00 昼休憩

13:00～16:30 国際シンポジウム「東アジアにおけるオーラルヒストリーの展開と課題」

尹 澤林（韓国・オンライン）、許 雪姫（台湾・オンライン）、蘭 信三（日本・会場）

16:30～16:40 閉会 会長挨拶、開催校挨拶

2. 自由報告要旨

【第1日目】9:30~12:15

・「国際結婚で福島県に嫁いだ中国人女性の「心の揺らぎ」—ライフストーリーから読み解く—」

王 石諾（大阪大学大学院人間科学研究科博士後期課程）

三好 恵真子（大阪大学人間科学研究科教授）

1980年代後半から、深刻な「男性結婚難」という日本社会の現状に伴い、アジアから日本に結婚移住した女性の問題に焦点を当てる議論は盛んである。報告者のこれまでの調査では、概して歴史文脈から日本と関係性の深い中国東北地方に生まれ、結婚により来日する福島県在住の女性の眼差しに着目した。そして、故郷を離れ日本語を話せず移住してきた経験から、2011年大震災の記憶や日中の境界にさまよう内面的な諸相について、ライフストーリーを記述し、彼女らが「構造」の内に模索しつつ形成された主体性やそれを裏返して非常時に「災害弱者」を越える側面が発露されることを確認できた。したがって、本報告では、残された課題、すなわち、一見すると日本において充実な暮らしを送っているように見える女性たちの語りの中に見え隠れしていた「心の揺らぎ」に注目し、その奥に潜む内実の意味解釈を試みた。

・「運動と知—鶴見良行のフィールドワークから考える」

山本 真知子（同志社大学大学院博士後期課程）

本報告は、コロナ禍で移動できず聞きとり調査ができない状況下で鶴見良行に出逢い、読み進めてきた報告者の経験に基づくものである。鶴見良行は、1960年代より東南アジアを歩くということを通して、資本主義によって分断された関係性を変えようとしてきた稀有なフィールドワーカーである。本報告では、鶴見のフィールドワークの実践をたどっていくなかで、歩くことを通して知、さらには関係性を再編していくことの意義を再確認すると同時に、その調査実践のなかに運動論的可能性を見出していく。そこから、個々の現場性において鶴見はいかに読まれうるのか、オーラル・ヒストリーはいかにして運動と知をつなぎ、現状を変えていく一端を担いうるのか検討したい。

・「アイヌ民族の人々の「声」を聞くための新しい研究法の開発」

岩佐 奈々子（北海道大学大学院 教育学研究院）

アイヌ民族の人々に関する研究は、その多くがアイヌ以外の人々が行ってきた。しかし、近年ではアイヌの人々自らがアイヌ民族やアイヌ文化についての研究を行い、自らが語るという新しい研究の流れが増え、また先住民族という新しい視点も加わっている。本研究では、このような新しい動向を踏まえ、アイヌの人々の「声」に焦点を当て、その「声」を聞くための新しい研究方法を見出していく。そのために、国内の研究からは“ライフストーリー法”という対話的構築の視点と、先住民族という観点からハワイ大学における“バイオグラフィ法”という2つの視点を通して、先住民族であるアイヌの人々の「声」を聞くための方法を多角的に検討していく。

・「裾野で生きる町工場—設備導入をめぐる人びとの聞き取りをとおして」

加藤 英明（南山大学人類学研究所）

本報告は、愛知県の自動車産業に関わる町工場の人びとの設備導入に着目し、大量生産体制のもと、どのように技術を確立したのか報告する。従来の研究は、トヨタのサプライヤー・システムの成立過程に大きな成果をもつが、末端の町工場は、必ずしもそれと同等のモノづくりをおこなっているわけではない。報告では、金属加工の町工場の父親と息子2人が、個々人の考え方や経歴、技術的問題、生産性などと折り合いをつけながら、どのように設備導入を選択したのか、その変遷を町工場の成り立ちとともにたどる。そして、量産とは異なる「単品モノ」と呼ばれる一品部品のモノづくりに価値を見出し、裾野で生き抜いてきた経緯を報告する。

・「イギリスにおける Narrative Analysis の展開と貢献：2000年代以降の諸報告から」

ウォーターズ めぐみ（翻訳家、文筆家、データーリサーチャー）

本発表は、主に2000年代以降のイギリスにおけるNarrative Analysisの進展を踏まえ、オーラルヒストリーのアプローチや記録・分析の用いられ方、Biographic Narrative Interpretive Analysis (BNIM)の手法等を紹介することを意図したものです。特に医療・福祉・教育・多民族社会政策等の分野で、市場原理や従来の制度枠内に入りきらない様々な実態とそのエビデンスを把握・収集するため、オーラルヒストリーが活用されています。「何が語られているか」「どのように語られたか」等に焦点を当て、根底にある価値観を浮き彫りにすることや分析・評価を更に進める可能性等について、検討できることを希望しています。

【第2日目】9:30~12:00

・「「好き」を生きる度胸——漁に出づける突棒漁師のライフストーリー」

吉田 静（立教大学社会学研究科博士後期課程）

突棒漁とは、船の先が細くのびた突棒船でカジキ等の漁獲対象を追い鉛を投げて漁獲する漁法であるが、現在、効率よく収益をあげられるような漁ではないと語られている。漁師Aさんは、このような突棒漁を「好きだの（が）、もお先だのよ。何も金儲かる訳でねえ」と語り、高齢になっても漁に出づけている。本報告では、このように語る漁師Aさんはなぜ漁に出づけているのかを考察し、Aさんの「好き」を選びとる生き方がいかなるものかを明らかにする。そして、「好き」を選びとることへ後ろめたさを感じてきた私とAさんとの対話を通じて、Aさんの生き方の現代社会的意味についての検討も試みる。

・「ストリップ劇場のエスノグラフィー」

石川良子（松山大学）

かつては全国に300軒以上あったというストリップ劇場だが、現在は20軒以下にまで減っている。法規制が厳しく新規開業は実質不可能であるため、今ある劇場がなくなればストリップは「絶滅」するしかない。ただ裸を見せるだけのように思われているが、それだけではストリップは成立せず、ステージには長年培われてきた芸が詰め込まれている。客もまた単に裸を見に来ているわけではなく、踊り子の芸とその奥に透けて見える生き様、客同士のつながりなど様々なものを楽しんでいる。ストリップは偏見に晒され、摘発の対象ともなっているが、このまま失われてしまうのはあまりに惜しい。そこで生きている人々の姿をまずは見つめたい。本報告では中四国で唯一営業を続けている愛媛・道後の劇場における人間模様の一端を描写する。

・「熊本ラオス友好協会「ラオス遠隔地高校生就学支援事業」被支援者の経験」

坂井 華海（熊本大学 大学院自然科学教育部 博士後期課程）

熊本ラオス友好協会は、1999年に設立以来「ラオス遠隔地高校生就学支援事業」を企画・実施してきた。そこでは駐ラオス日本国特命全権大使経験者である坂井弘臣氏（故人）が中心となって、熊本の人びとと共に支援事業を運営してきた。2017年に坂井氏が他界後も支援事業は継続しており、2019年には「ラオス遠隔地高校生就学支援事業検証プロジェクト」が発足した。報告者は、検証プロジェクト（資料調査、インタビュー調査、アンケート調査）を協会メンバーと協働実践している。本報告では、被支援者を対象とした調査で明らかになったライフヒストリーについて報告する。

・「番組制作プロダクション・テムジンにおける制作文化の形成と定着--制作者の語りから」

朱子奇（東京大学大学院学際情報学府 博士後期課程）

テレビ・ドキュメンタリーを多数制作してきた番組制作プロダクション・テムジンは30年以上にわたって中国を取材し、「中国専門」の制作プロダクションとして発展してきた。番組制作プロダクションを分類するとき、ドキュメンタリー専門やドラマ専門など、制作番組のジャンルに依拠することが多いが、なぜテムジンは自らを「中国専門」の制作プロダクションとして位置付けし、中国取材を長年続けてきたのか？本報告はこのような疑問を持ち、テムジンの設立者と所属制作者にインタビューを実施し、テムジンはどのような制作プロダクションで、どのように設立され、いかなる制作活動を行い、なぜ「中国専門」の制作プロダクションとして発展してきたのかを明らかにする。

・「満鉄鉄道事故者の妻が語る夫の受傷体験と戦後の生活」

藤原 哲也（福井大学）

この報告では福井県勝山市の満鉄鉄道事故者の妻（1939～）の語りから夫の受傷体験と夫婦の戦後の生活実態について検討する。満鉄元職員であった夫（1928～2000）は、1943年11月満州国新京駅にて両脚切断の鉄道事故に遭遇し、闘病生活を送った後に戦後に帰郷を果たした。夫は準軍属という身分のために長く障害年金の受給対象外となっていたが、戦傷病者戦没者遺族等援護法の改正により1970年障害年金を獲得するに至った。妻の口述記録および夫が生前残した障害年金申請書類から障害年金を獲得するまでの過程、他の満鉄事故者との交流、夫を支えた妻の役割を含む生活実態を明らかにし、妻の語りという二次証言の可能性についても考察する。

3. 会長企画「JOHAはどこから来て、どこに向かうのか？」主旨

日本オーラル・ヒストリー学会、通称 JOHA は学会として 20 年を迎えることとなった。JOHA は「口述史資料を扱う日本の研究者だけでなく、ジャーナリストをはじめ口述記録を収集してきたさまざまな分野の実践者が、国内外へ情報を発信し、ジャンルを超えて相互交流し、方法論を研鑽して理論研究もできる場として、設立」された。この理念のもと現在は 250 名を超える会員が所属し、学会としても徐々に実績を積み重ねてきている。

例えば、当初理念として「多様なメディアの使用も考慮しながら、インタビューや音声史資料のよりよい保存、収集、利用方法を研究し、方法論を研鑽し、実践を行う人々のために各分野の相互交流を行い、口述史資料への理解が深まる場となるよう、努力していきたい」という想いは確実につながれ、方法論的にも理論的にも進歩しつつあるように思われる。実際ここ数年の取り組みとして、研究実践会では京都市内、横浜、千葉県の飯岡など、現地に赴き、現場でも声を聞く取り組みを行っているし、学会のテーマでもメディア（映像）、ビジュアルオーラルヒストリーに注目するなど、多様なテーマが扱われている。方法論においても「ライフストーリー」「聞き書き」など本学会で中心的に研鑽されてきたテーマも多い。

ではこうしたこれまでの取り組みから現在求められているものはなにか。そして今後さらに転換すべきものは何か。再び設立当初の理念に立ち返るならば、「私たちオーラル・ヒストリー実践者は、それぞれの専門分野以外の実践者と交流する機会を求めていましたし、ジャンルを超えた全国的なネットワーク・組織の設立を望んで」いた。しなしながら現在の学会は主に研究者が中心であり、「ジャンルを超えた全国的なネットワーク・組織の設立」には至っていないと思われる。さらに言えば、国際的な展開はまだまだこれから課題であろう。

こういった認識のもと、今後の JOHA を考える上で、設立当初の JOHA の想いを確認し、現在の位置づけ、そして今後について考えることをシンポジウムのテーマとしたい。すなわち JOHA の 20 年の歴史を振り返るとともに、その実践のありかたを考えることがシンポジウムの目的である。

趣旨説明：佐々木てる

司会： 大門正克

スピーカー

中尾知代「JOHA の事始め～設立者の今の思い」

桜井厚「オーラルヒストリーとライフストーリー」

清水透「歴史学の視点から（仮）」

コメント：山村淑子、中原逸郎、安岡健一

4. 国際シンポジウム「東アジアにおけるオーラルヒストリー／口述史の展開と課題」

2003 年に日本オーラル・ヒストリー（JOHA）学会が設立され、本年で 20 周年を迎えます。その大きな節目を記念するシンポジウムとして、「東アジアにおけるオーラルヒストリー／口述史の展開と課題」を開催いたします。そこで、韓国や台湾など東アジアを代表するオーラルヒストリー／口述史研究者を招待し、各オーラルヒストリー／口述史の展開と課題について報告し、今後の東アジアにおける研究交流の在り方について論じます。

東アジアにおけるオーラルヒストリー／口述史は古い伝統を持ちます。しかし、20 世紀後半にその方法が再び注目され、21 世紀になって各国でオーラルヒストリー／口述史学会が設立されました。くしくも、韓国口述史学会も台湾口述歴史学会も 2009 年に設立され、歴史学、社会学、人類学などの領域において大きな役割を果たしてきました。

各学会は、それぞれの伝統を踏まえながらも、1960 年代の欧米の理論や方法論を学び、各国の社会状

況を反映する独特な研究が深められてきました。しかしながら、社会経済文化において強く影響しあう東アジアの各地において、そのオーラルヒストリー／口述史研究の交流は十分ではありませんでした。そこで、JOHA20周年を記念し、東アジア各地におけるオーラルヒストリー／口述史研究の展開と課題について互いに学びあうことを発起し、今後の研究交流を促進していきたい所存です。

以上のシンポジウムの趣旨にもとづき、韓国からは尹澤林氏（韓国口述史研究所所長）、台湾からは許雪姫氏（台湾中央研究院台湾史研究所特聘研究員兼所長）、日本は蘭信三氏（大和大学／上智大学）が登壇します。シンポジウム・プログラムとしては、前半は三人の報告、パネルディスカッション、後半はそれらを踏まえて総合討論を行います。報告はそれぞれの公式言語で行いますが、同時通訳されます。また、今回は会場参加とオンライン参加のハイブリッド形式で行い、JOHA会員のみでなく韓国や台湾の口述史学会員を主に「一般公開」（先着1000名）する方針です。なお、本シンポジウムは科学研究費補助金（課題番号18H00932）「東アジアのポストコロニアルを聞きとる」との共催です。

司会：李 洪章（神戸学院大学）・清水美里（名桜大学）

(1) 報告

第一報告：尹 澤林（韓国口述史研究所）「韓国口述史の軌跡と展望」

第二報告：許 雪姫（台湾中央研究院）「戦後台湾オーラル・ヒストリーの展開」

第三報告：蘭 信三（大和大学）「日本におけるオーラルヒストリーの展開と課題」

(2) パネルディスカッション（上記三名による）

(3) 総合討論

II. 理事会報告

1. 第10期 臨時理事会 議事録

日時：2022年1月23日（日）13:00～16:00

場所：オンライン開催

出席：蘭信三、大門正克、酒井朋子、佐々木てる、佐藤量、佐野直子、清水美里、謝花直美、相本歩美、野入直美、安岡健一、李洪章、米倉律、和田悠

議事録作成：佐藤量

1. 20周年企画案について

佐々木会長より次回大会における20周年企画について提案され、審議された。20周年企画では、20年の学会活動の中で何が蓄積され何が課題としてあるのか、設立当初の思いをどのようにつなげていくかについて考えたい。特に設立当初からの課題として、国際的なネットワークの構築、研究者以外の実践者

とのつながり、新聞やテレビ、ジャーナリズムの人々との連携などが残されている。今後の JOHA を考える上で、現在の位置づけ、そして今後について考えることをシンポジウムのテーマとしたい。また企画は 2 部構成で、前半は JOHA のこれまでの活動について振り返り、後半ではこれからの方針について議論することが報告された。

審議では、まず企画の日程について確認され、大会 1 日目の午後に開催することが了承された。

次に司会者、登壇者について審議された。司会者として大門正克氏や清水透氏などが提案され、登壇者では中尾知代氏、桜井厚氏、小林多寿子氏、山村淑子氏、小倉康嗣氏、野本京子氏、中原逸造氏、石川良子氏、安岡健一氏などが提案された。審議内容をもとに佐々木会長を中心に登壇者を調整し、継続審議とすることが確認された。

2. 奨励賞について

佐々木会長より奨励賞規約案が提起され、主に①第 1 条「奨励賞の目的」の修正案、②第 2 条「受賞者資格」に研究歴を入れるか入れないか、③第 3 条「選考対象」の著書の範囲について確認、審議された。

①第 1 条「奨励賞の目的」の文言について、日本オーラル・ヒストリー学会会則第 2 条にある「本学会の目的」をふまえて、「オーラル・ヒストリーの研究を進め、日本でオーラル・ヒストリーをより広め、その発展に寄与するため」という文言を追加した。追加理由としては、個人の研究の顕彰のみならず、オーラル・ヒストリー研究の社会的役割を高めることを意図するためであることが説明された。審議では提案された会長修正案が確認され、承認された。

②第 2 条「受賞者資格」については、下記の案 1（研究歴を入れる）と案 2（研究歴を入れない）が提案され、会長としては案 2 を推したい旨報告された。

【案 1】 将来日本のオーラル・ヒストリー研究の発展への寄与が期待される研究業績を公刊した研究歴〇年（著書の部）／〇年（論文の部）以下の学会会員とする。

【案 2】 受賞時において本学会に在籍する会員で顕著な研究業績を公刊し、今後一層の日本のオーラル・ヒストリー研究の発展への寄与が期待される学会会員とする。

審議では、案 2 に賛同する意見が出され、その上で、第 2 条に「今後の発展に寄与する」という文言を入れるとやや冗長的ではないか、若干の重複感はあっても残してもいいのではないかなど意見があった。今後細則などで細かい規定を加えつつ、大枠として案 2 を理事会案とすることが承認された。

③第 3 条「選考対象」の著書の範囲について

当初の案では「著書」の範囲が広すぎたため、第 3 条の文言を「著者の最初の単著書」に限定する案が提出された。審議では修正案に賛同する意見が出され、その上で、「最初の単著」は単なる単著ではなく「学会の発展に寄与する本」であることが重要であり、相応しい研究であることを受賞理由としてきちんと説明できるかどうかが大切になってくるなどの意見があった。

以上の審議を経て奨励賞規則は、案 2 を理事会の基本案として今後さらに細則を決定していくことと

が承認された。また今後の展開としては、理事会で原案をしっかりと練り、原案が出来上がったら会員向け ML で諮りつつ、次期大会の総会にかける段取りとすることが確認された。

3. その他

① 編集委員会

会員より、共著論文の投稿に関してセカンドオーサーも学会員でなくてもいいのか？という問い合わせがあったことが報告され、認否について審議された。

審議では以下のような意見が出された。執筆者全員が学会員であることが論文掲載の前提であり共著論文についても同じであると考えるため反対、招待論文では非会員の方に書いてもらうこともあり得るが、投稿論文は共著であっても全員が会員である必要があるのではないか、投稿規約には会員であることが明記されているため、素直に読めば共著論文であっても同じであることはわかると思う、など。

以上から、共著論文の投稿においても執筆者全員が会員であることが前提であることが確認され、承認された。

② 研究活動委員会

安岡委員長より大会シンポジウム（2日目午後）についての中間報告があり、2つの案が提案された。なお両案ともに、基盤研究 B「東アジアのポストコロニアル経験を聞き取る：日台韓オーラルヒストリーの比較研究」（代表・蘭信三）との共催や、予算は蘭科研からの支出を予定していることが報告された。

【A案】シンポジウム「東アジアにおける OH の展開と課題（仮）」

韓国、台湾、シンガポールから各国のオーラルヒストリー学会の会長職にあたる方を招聘して、各国の OH の展開と課題を議論する。懸念材料として、近年の中国と台湾との政治的な関係からどちらから招くのかといった問題あり、登壇者を決定する上で考慮すべき点かと考える。

【B案】テーマセッション「東アジアのポストコロニアルを聞きとる」

韓国、台湾、日本から登壇者を招く。これまで大会で行われてきたテーマセッションの持続性を考慮しても有意義。

研活としては A 案を考えていたが、中台問題への配慮も重要。その上で、蘭理事より、前理事の上田貴子氏からの情報提供として、2021 年 11 月に孫文記念館で開催された辛亥革命 110 周年シンポジウムの際には中台両岸から出席者があり、研究者個人が登壇する場合には当局もそこまで関与しないのではないかという意見が紹介された。

審議では、現職の会長や代表職の方ではなく、個人として来てもらえば大丈夫ではないかと意見が出来、それをふまえて A 案で進めることが確認、承認された。引き続き研究活動委員会にて継続審議し、適宜理事会 ML にて共有することが確認された。

③ 議事録について

大門理事より理事会議事録について 3 点提案があった。

- 理事会議事録の作成について、年長者も含めて議事録作成者をローテーションの中に含めてほしい。そうすることで理事全員が議論内容を共有しやすくなるのではないか。
- 総会の議事録の掲載場所について、現在は学会誌ではなく、ニュースレターと HP に掲載されている。学会誌にも掲載して紙媒体で継続的に確認できてもいいのではないか。
- 今季理事会の発足時に、理事会が交代するタイミングでの総会議事録作成について、新しい理事会が総会議事録に関与できないという議論があった。理事会が変わるタイミングにおける前理事会の総会議事録作成については、新しい会長や事務局長が関与してもいいのではないか。規約追加も含めて検討の提案があった。

上記 3 点の提案を踏まえ、佐藤事務局長のもとで審議事項として検討していくことが確認された。

2. 第 10 期第 3 回 JOHA 理事会 議事録

【日時】2022 年 7 月 9 日（土）9:30～11:55（Zoom によるオンライン会議）

【出席者】佐々木てる・佐藤量・李洪章・佐野直子・酒井朋子・相本歩美・山田富秋・米倉律・安岡健一・蘭信三・大門正克・清水美里・謝花直美・和田悠・野入直美（敬称略）

【議事録】山田富秋

佐々木てる会長から挨拶

編集委員会（佐野直子委員長）

報告事項

学会紀要の『日本オーラル・ヒストリー研究』の刊行先がインターブックスから明石書店に変更した。先日、委託料を年間 100 万円とした契約手続きが完了したところである。次号の 18 号原稿は、明石書店にすべて入稿済みである。

審議事項

投稿規定改訂案について（添付資料）

投稿カテゴリーを A,B,C,D の 4 つに分け、研究ノートの文字数と査読手続きを明示し、研究ノートの位置づけを明確にする改訂を行った。また、D の書評・図書紹介はすべて 4 千字以内とし、書評論文と差別化した。C,D の聞き書き資料等や書評・図書紹介については査読審査はせず、編集委員会が掲載の可否を決定することとした。その他、論文中のカッコの使い方について、技術的修正を行った。

質疑応答

明石書店からまだ契約書が届いていない。先方とのコミュニケーションの齟齬があるので、確認する必要がある。また、若手にとって研究ノートについても査読があった方が良いという意見があった。

質疑応答後、この改定案を理事会で承認し、総会での審議に諮ることになった。総会での承認後に、改訂版の投稿規定・執筆要領を 18 号の巻末に掲載する。

研究活動委員会（安岡健一委員長）

報告事項

6月25日にシンポジウム「語りを一冊に編み上げるまで：野入直美（2021）『沖縄-奄美の境界変動と人の移動』を手掛かりに」を上智大学とオンラインのハイブリッド形式で開催した。司会を蘭信三氏が務め、著者・野入直美氏、インタビュー対象者・重田辰弥氏、編集者・岡田林太郎の各氏が報告し、有末賢・根本雅也の両氏がコメントした。ハイブリッドで開催し、会場15名とオンライン74名の合計89名という多くの参加者を得ることができた。

審議事項

JOHA20 大会について（大会スケジュール・プログラム、各シンポジウム、開催校報告等）

今大会はオンラインと対面のハイブリッド開催とする。一般報告については、オンラインと対面の部会に分けてプログラムを作った。

大会1日目

9:15 開会

9:30～10:30 オンライン個別報告 3本

10:45～12:15 対面個別報告 2本

12:15～13:10 昼食（理事会）。理事分のお弁当を準備。

13:15～16:45 JOHA20 周年会長企画シンポジウム

17:00 総会

18:00 感染防止のため、懇親会の代わりに1時間程度懇談会を行う。

大会2日目 9:00～12:00 対面個別報告 6本

12:00～13:00 昼食（シンポジウム打ち合わせを行うのであれば、登壇者のお弁当を準備）

13:00～16:30 国際シンポジウム

・会場は大教室1つで運営予定。会場のビデオ撮影もする。今後のスケジュールとしては、7月末までに報告タイトルと企画要旨を集約し、8月頭頃にニュースレター、HP、MLにて広報を開始する。

質疑応答

国際シンポジウムの詳細について蘭信三理事から説明があり、国際シンポジウムは蘭代表の科研とJOHAの共催で行い、本シンポジウムのみ一般公開とすることが提案され了承された。シンポジウムの詳細は以下の通り。

（1）国際シンポジウムについて

①テーマ「東アジアにおけるオーラルヒストリーの展開と課題」

②司会・進行 清水美里・李洪章（趣旨説明）

③登壇者 韓国 尹澤林（オンライン参加）、台湾 許雪姫（会場参加）、日本 蘭信三（会場参加）

④プログラム

- ・前半は趣旨説明と 3 人の報告で 120 分
- ・後半は報告者 3 名によるパネルディスカッション+総合討論で 90 分

⑤閉会は研活委員長か会長が宣言する。

⑥質問の受付

- ・会場参加者は当日も質問が可能だが、オンライン参加者は事前の質問のみとする。

⑦シンポジウムの「公開」と参加費について

- ・このシンポジウムは大会特別枠として参加費を無料とする。日本国内だけでなく、韓国と台湾でも一般公開とする。参加は事前登録制として、学会前日の 9 月 8 日か 9 日に事前の接続テストを行う。

⑧進行について

- ・司会は日本語で進行する。登壇者はそれぞれの言語で行い、同時通訳を行う。
- ・本会場+韓国語通訳室+中国語通訳室+オンラインの 4 室が参加する。
- ・本会場の許先生は PC で Webex に入り、イヤフォンで参加する予定。
- ・立教大学から Wi-Fi 使用のためのゲスト ID を貸与していただく。

⑨その他

- ・次号の『日本オーラル・ヒストリー研究』への提出原稿は日本語への翻訳を行う（3 カ国語に翻訳するかどうかは未定）。
- ・通訳：同時通訳の予定：韓国語・中国語→日本語、その後日本語→中国語・韓国語

（2）シンポジウム経費見積もり（100 万円から 110 万円）

①2 カ国語の同時通訳：サイマルインターナショナル（50 万円）

②Cisco WebEx の契約料（10 万円程度）

③サムクイックへのコーディネータ料（20 万円）

④報告原稿の翻訳料（10~15 万円？）

⑤許先生の旅費滞在費（10~15 万円）

⑥報告者への謝金（各 5 万円、合計 10 万円）

* ご本人は自弁で参加と言われるが、学会での招待なので、チケットか滞在費を準備。

説明の最後に提案として、Webex のライセンス契約料 10 万円を JOHA が負担して、共催という形式に沿ったかたちにすべきではないかという提案があった。

・この提案については研活委員長の安岡健一理事からも、JOHA 共催ということと、20 周年大会ということで例年より 10 万円多い予算が組まれているので、Webex のライセンス契約を結ぶのは自然ではないかという補足説明があった。

・佐々木会長の意見として、ライセンス契約の支出をするのはまったく問題ないと思うが、会場全体の運営予算について会計の李洪章理事の意見を聞きたいという要望があった。

・会計担当の李理事から、今回は 20 周年なので、例年対面で実施されていた 30 万円に 10 万プラスして予算立てしているので、ライセンス契約費を支払っても問題ないという回答があった。

・蘭信三理事から追加として、このシンポジウムは公開にすることは理事会で決定してほしいという要望が出る。日本だけでなく韓国や台湾のオーラル・ヒストリー学会に公開することで、JOHA にとって

も、オーラル・ヒストリーの東アジアでの展開についても今後の良い影響があると考えられるからという理由である。なお、韓国と台湾にある、それ以外の関連学会への公開については、韓国と台湾のオーラル・ヒストリー学会にお任せしたい。

・清水理事から、一般公開といつても、事前登録制になるという補足説明があった。なぜなら、参加希望者は事前に登録して、その登録したメールアドレスに対して Webex にオンラインで参加できる URL を提供するので、完全に匿名で参加することはないからということである。

・佐々木会長から、オーラル・ヒストリー研究の今後の国際的な広がりを展望に入れるという点でも望ましいと思うという同意があり、理事会全体でもこの案を承認した。その後、佐々木会長は会場での同時通訳は技術的に可能なのかどうかという質問を研活に対して行った。

・清水理事からの回答があり、立教大学から Wi-Fi 使用の ID を貸与してもらうので、会場でもイヤフォンで参加して同時通訳を聞くことはできる。その場合、参加時にイヤフォンの持参をニュースレターで事前にアナウンスしておく必要があるとのこと。

・佐々木会長から、このシンポジウムを Webex で録画して、大会終了後に期間限定で視聴できるようにするのかどうかという質問があった。

・清水理事と安岡理事から回答があり、Webex の録画機能については現地では不明であること、さらに Webex を使うのではなく、現地に設置したビデオカメラを使って録画し、後ほど編集して保存する準備をしていると説明された。また、後ほど提案するように、YouTube に JOHA チャンネルを作りたい。もし承認されれば、そこで配信することも可能であるが、まだ細かなところまでは詰めていないということである。また、韓国と台湾における配信の問題については、今後考えていきたいということになった。

20周年会長企画「JOHA はどこから来て、今どこにいるのか」について

・次に佐々木会長から 20 周年記念シンポジウム会長企画の説明がなされた。2022 年 5 月 14 日にオンラインで打ち合わせを行った。趣旨として、設立当初の JOHA の想いを確認し、現在の位置づけ、そして今後について考えることをシンポジウムのテーマとする。JOHA の 20 年の歴史を振り返るとともに、その実践のありかたを考えることがシンポジウムの目的である。打ち合わせの時に話が出たのは、次号の学会紀要には 2 つのシンポジウムが掲載されるので、大部となることが予想されるということ。必要であれば、刊行費の予算を増額することになる。

趣旨説明：佐々木てる

司会：大門正克

語り手：

中尾知代 JOHA 創設メンバー その想いについて 国際的なつながり

清水透 歴史学的な視点と JOHA／女性学

桜井厚 方法論的な影響 ライフ・ストーリー研究と JOHA

コメンテーター：山村淑子・中原逸郎・安岡健一

シンポジウムスケジュール

13:00 集合

13:15 開始

司会進行：大門正克

挨拶・シンポジウム主旨説明：佐々木てる（5分）

13:20～13:50 第一報告 中尾知代

13:50～14:20 第二報告 清水透

14:20～14:50 第三報告 桜井厚

（休憩 10分）

15:00～15:10 コメント・質問①山村淑子

15:10～15:20 コメント・質問②中原逸郎

15:20～15:30 コメント・質問③安岡健一

15:30～16:00 登壇者による応答

16:00～16:45 フロアを含む総合討論

質疑応答

安岡健一研活委員長から予算については計上しなくても良いかという確認があった。登壇者は全員会員なので、予算は計上しないことを確認した。司会の大門理事から興味深い企画であることが追加された。

米倉理事から大会プログラムについて質問があった。それは、朝一で行われるオンラインの一般報告について、対面参加者はどのようにしてオンラインの発表を聞くことができるのかという質問。研活委員長から、会場では大きなスクリーンでオンライン発表を聞くことができ、もし移動中であっても、オンラインで視聴できるので、かえって利便性が高いのではないかという回答があった。

ここで、会場校の和田悠理事から追加の説明があった。説明と言うよりも、大会予算のことで教えていただきたい。Webex の契約料については大会予算から支出されるということで、問題ないと思うのですが、大会運営に必要な学生アルバイトはどのくらいの人数が必要なのか教えてほしい。大学からは 5 万円学会開催補助が出るので、それでアルバイト代はまかなえると思うが。もう一点は、参加費の値段の設定についてですが、感染防止の観点から、大学に参加者リストを提出し、参加者にはスマホでも提示できる参加許可証を発行しなければならないので、そのへんの兼ね合いも議論してほしい。会場についてはオンライン配信機器などが十分に整っている。

山田理事からここで参加費について質問があり、一般公開される国際シンポジウムは参加費無料で、他のプログラムについては参加費を取るということなので、この 2 つを区別しながら、どのようなやり方で参加費を徴収するのか聞きたいとのこと。

李洪章会計から回答がある。後ほど説明するが、大会自体は国内の一般会員と非会員については参加費を取る。大会参加希望者には、オンラインのクレジット決済システムである Peatix で参加費を支払ってもらい、対面参加の方にはスマホで提示できる参加チケットを送り、オンライン参加の方には事前に Zoom の URL を送る。立教大学の場合、入構する場合には事前に許可が必要なので、対面参加者のリストを作成して大学に提出する。対面参加者にはスマホでも提示できる参加証を送る。国際シンポジウムは一般プログラムとまったく別の扱いになり、全員の参加費は無料にするが、オンラインで参加できる

ように参加登録は行う。

この後、ハイブリッド開催の大会運営について、研活の複数の委員と会計とで、和田悠理事にさまざまなアドバイスを行った。以下が内容の要約になる。Webex の契約料については会計から直接支払うことになるが、大会会場で使用する Zoom の Webinar については、和田理事が大会用のメールアドレスを作成して、Zoom 社と契約してほしいとのこと。また、大会長の和田理事は Zoom 等の IT 関係には疎いので、国際シンポジウムを支援するサムクイックのスタッフを初め、研活委員の知り合いで専門的な技術を持っている大学院生や教員に謝金を支払って、ハイブリッド開催あたってのテクニカルな支援を行う態勢を整えることになった。

また、当日の学生アルバイトの人数については、過去は 10 名程度だったが、今年は Peatix の利用により、受付に必要な金銭授受等はなくなるので、かなり人数を絞ることができる。スマホによるチケット提示の確認や掲示物の貼付と会場案内だけなので、会場運営スタッフを 2 人くらいに限定して、ハイブリッド開催のための IT 支援の方を厚くするようにした方が良い。国際シンポジウムの方はサムクイックにお任せしているので、他のアルバイトは午前で終了でも問題ない。

お弁当については、1 日目の午後の理事会とシンポジウムの打ち合わせをする場合は、その人数分のお弁当が必要になる。二日目のシンポジウムのお弁当は必要ないとのこと。ただし、理事会はオンラインでも参加できるようにハイブリッドにしてほしいという要望があった。この点については、これから調整したいという会長からの回答があった。また、ネームホルダーについては、事務局で保管しているので、大会校に送付することになった。

2023 年度大会（JOHA21）開催校について

安岡研活委員長から、最初にプログラムにもどって、1 日目のプログラム終了後の懇談会はいかがでしょうかという問い合わせがあった。感染状況にもよると思うが、集まれる人だけでも集まって懇談会を行いたい。

次回大会は沖縄で行いたい。会場を琉球大学にお願いできないか。テーマは「沖縄をめぐる占領体験をどう書くか／どう聞くか」を考えている。

野入直美理事から回答があり、まだ大学の方に打診していない状況なので、わからないが、ハイブリッド開催が可能なのかどうかも、謝花理事や中村春菜会員とも一緒に相談して、これから準備していきたい。佐々木会長から、ぜひ沖縄大会を実現させたいので、こちらも全面的にバックアップしていきたいという話があった。

YouTube に JOHA チャンネルを開設する提案

- ・目的：JOHA の企画による成果を幅広く公開し、その他の情報発信を推進する。
- ・理由：現在ブログ形式のウェブサイトを一つ運営しているだけの日本オーラル・ヒストリー学会では、もっぱら企画や生命の通知と公募情報の提供くらいしかしていない。積極的に活動を可視化することで、学会の社会的な存在感を高める必要がある。もちろん、話者・参加者の合意が必要である。また、ハイブリッド企画のイベントについては、録画データの提供を求められることがある。特定の希望した人に恩恵的に提供するくらいであれば、話者の合意が得られれば、最初から公開しておくのが良いのではないか。

・形式：学会理事（会長十四役）が共同管理して、YouTube チャンネルを運営する。コメントは不可とする。

今回の理事会で最終決定と言うより、みなさんのご意見をまず広くうかがってから決めたい。

佐藤量事務局長から、理事会が変わった時の継承について、問題なくスムーズにいくのかどうか質問があった。回答として、細かな技術的な点はわからないが、公的なチャンネルを見ると大丈夫だと思う。佐々木会長から、他に学会でやっているところがあるかという質問に対して、安岡理事から土木学会の例、蘭信三理事から小林多寿子さんが会長をしている学会の例、それに Memory Studies Association がソウルで大会をしていて、それをそのまま YouTube で流している例を紹介した。

最後に会長として、この提案には賛成だが、これは次の理事会にも継承される学会運営の問題になるので、総会に諮って承認する必要があるという補足があった。その際には、チャンネル創設の趣旨文などを整理し、例えば、掲載可否の承諾を取る手続きなどの明確化などが必要。今後の段取りとしては、総会前に研活と会長とで原案を考えて、その文案を理事会 ML で承認を取ってから総会に諮る。今回のシンポジウムの企画については、事前に登壇者に YouTube で流す予定もあることをアナウンスする。総会で承認され、登壇者からも承認が取れたらアップロードする。韓国オーラル・ヒストリー学会や台湾口述史学会がどのようにしているか学ぶこともできる。

会計（李洪章理事）

審議事項

1. 決算・予算案について（添付資料）

資料にもとづいて、決算資料を提示。会費収入を 100 万円と計上していたが、予算より 93,880 円収入増であった。学会費広告は予定よりも多い 8 社に依頼することができたので、予算よりも約 4 万円増収となった。また支出の方を見ると、大会運営費は対面を想定して 20 万円を計上していたが、オンラインになったので、Zoom 契約等の 117,950 円ですんだ。学会誌の発行元は、インターブックスからどこかの書店に変更することになっていたので、印刷費として 100 万円を計上していたが、昨年度はインターブックス最後の発行となり、78 万円に抑えることができた。予備費は来年度の繰越金として想定していたもので、例年 200 万円強が残るだろうと予想されていたが、実際には 2,595,995 円が繰越になるので、想定よりも支出が少なかったと言える。

予算案に移ると、収入については対面も含めたハイブリッド開催になるので、25 万円程度の収入があるだろうと見込み、ワークショップ収入も例年通り 1 万円を計上した。大会運営費は 2019 年に 30 万円についていたところ、今年は 20 周年の記念大会なので、プラス 10 万円ということで 40 万円で計上している。学会誌費は明石書店に移るので、110 万円で計上した。その結果、次年度繰越金が 210 万円程度に減ることになる。ここで会計監査になるが、監査を予定していた赤嶺淳先生と小林多寿子先生のうち、赤嶺淳先生から退会届が届いていることが確認された。その結果、会長の方から監事の仕事を赤嶺淳先生に直接お願いすることになった。

2. 会費について

繰越金が 250 万円から 200 万円程度まで減りそうだということと、何かあった時のために予備費は常に 200 万円以上をキープしておく必要があると前会計担当から引き継いでいるが、今後は学会誌費の費

用がかさむということで、会費の値上げを提案せざるをえない状況であることが報告された。

そこで、会計からの提案として、一般会員の会費を現行よりも 1,000 円値上げして 6,000 円にする。学生他の会員は現行の 3,000 円を維持する。これによって約 20 万円の增收が期待できる。これで学会誌費の増額の 30 万円を補填できるというわけではないが、現在のオンライン会議を継続していくには、なんとか経費が削減できるので、200 万円の繰越金をなんとか維持できる見込みであることが報告された。

1と2についての質疑応答

佐野直子編集委員長から、むしろこれまでのインターブックスの学会誌費予算が少なく、今回の明石書店の 100 万円という金額は、妥当どころかかなりがんばってもらっている、その部分の 30 万円アップになってしまうというのは致し方ないのではないかという意見があった。今回の変更の大きな理由は、これまでの学会誌費予算が少なすぎたことに原因があったのではないかという指摘があった。

佐々木会長から、会費の値上げ分 20 万円がそのまま学会誌費のアップ分に移っていくというイメージでよいか確認があり、李会計からは会長の意見に同意する回答があった。

蘭信三理事から、今回の学会誌の投稿規定改定によって投稿の幅が広がったので、それが会員へのアピールになるし、研活の方でも国際シンポジウムを企画したり JOHA チャンネルを準備しているということが、学会費の 1000 円アップに納得してもらう理由になるという意見が出された。

大会会計について

・JOHA20 大会においても、「参加費 会員（一般）1,000 円, 非会員 2,000 円, 学生他 1,000 円」という、従来通り対面で行っていた時の金額で実施し、その上で、参加費の徴収方法を変更することが提案された。

・新たな参加費徴収方法として、対面・オンラインにかかわらず、Peatix でチケットを購入してもらう。8 月発行のニュースレターとメーリングリストで周知する。

・チケット種別は、「対面（会員・学生他）/オンライン（会員・学生他）/対面（非会員）/オンライン（非会員）」の 4 種類とする。立教大学の方で誰が対面で参加するのかを把握する必要があるので、このようなチケット種別にする。

・チケットごとにメッセージの送信が可能なので、オンラインチケット購入者に対しては、Zoom の URL を送信する。Peatix の運用シミュレーションをしたところ、それほど難しくなかったが、手数料の負担があった。手数料は 1,000 円につき 150 円かかるため収入は 850 円になる。これをクリアする方法として一般会員の参加費を上げるなどの方法があることが報告された。

質疑応答

・清水理事から、体調等の関係で、当初対面参加予定の方もオンラインに移行する場合もあるので、対面参加の方にも Zoom の URL は送るべきである。これに対して、李理事からそのようにするとの回答がある。

・蘭信三理事から、千円の参加費は安すぎるのではないか。会費値上げの前に、参加費の値上げがあるのではないか。ただし、JOHA の学会賞の時の問題が起こった時のように、確かに一般会員にとっては、千円の方が参加しやすいことがあると思う。

- ・山田理事から、10 年前に事務局長として大会参加費の値上げを提案した時に、大反対にあって、その時から金額が変わっていないという報告がある。
- ・これを受け、蘭信三理事から、10 年前から変化したのはオンラインでの配信が加わったことで、この設備に対するコストがかかっているので、少し参加費を高くしても説明できるのではないかという意見が出る。
- ・佐々木会長から、学生アルバイトの最低賃金が上がっているという背景もあると指摘があった。
- ・大会参加費は開催校で決められるのか、それとも、理事会で決めていたのかという会長から、事務局経験者の山田理事へと質問がある。記憶をたどると、総会で大会参加費の値上げを提案して、否決されたので、理事会で決めて総会に諮る手続きをしていたようだという回答になる。その結果、総会で提案して、次回から参加費を値上げするかどうか議論になる。これに対して、次回開催予定校の野入直美理事から意見が出される。沖縄での開催となると、会員の方は旅費・宿泊費がかさむ上に、値上げした参加費を払うことになり、沖縄で郷土史に関心のある方は、例えば 3,000 円の参加費では参加するのにかなりきびしいと思われる。
- ・これに対して、今年の開催校の和田悠理事から、立教大学は開催支援費をいただいた上に、会場費・光熱費がただということと、20 周年記念ということもあり、いろんな人を呼び込んでもらいたいということもあるので、今年度に限っては、参加費を上げないでいただきたいという要望があった。さらに、大会開催校によっては、かなり高額の会場費と光熱費を取られる場合もあるので、開催校の事情を考慮して参加費の金額を考えるという状況にもなってきてていると思うとのこと。この意見に対する蘭信三理事の賛成もあった。
- ・佐々木会長からの総括として、沖縄大会までは現状のままとし、沖縄大会の時に参加費を開催校に任せるとどうかの問題も合わせて、参加費の金額について意見を集約して原案を提示する旨提案され承認された。

報告事項

- ・丸善からバックナンバー価格について問い合わせがあった。
1~4 号：頒価 1,500 円
5~8 号：頒価 2,000 円
9 号：定価：2,000 円（本体 1,905 円+税）（旧税率：消費税 5%）
10~12 号：定価：2,000 円（本体 1,852 円+税）の記載（旧税率：消費税 8%）
13 号以降：定価：本体 2,200 円（税別）
問い合わせは、9~12 号の価格について、「本体価格+税」を優先し、増税分値上げするか、定価の 2,000 円を維持するかということだった。会長と四役と相談し、会計から直接販売する際には 2,000 円としてきたため、2,000 円を維持することにした。

広報（野入直美広報担当理事）

- ・ニュースレターの原稿集約について、7 月末に次回のニュースレターの原稿締め切りを置き、遅くとも 8 月 10 日にニュースレターを発行することが報告された。「大会の開催にあたって」を開催校の和田悠理事に 400 字程度で依頼する。大会のプログラム・国際シンポジウム・会長企画シンポジウム・自由報

告要旨は、安岡健一研活委員長が原稿を集約する。前回の臨時理事会の議事録はできあがっている。過去の JOHA イベントについて、2 月に行われた研究実践交流会「つながるオーラル・ヒストリー」の報告原稿については、安岡健一研活委員長がすでに学会誌に掲載しているので今回は掲載しない。6 月の書評シンポジウムについては、安岡健一委員長に原稿をお願いする。「お知らせ」として、佐藤量事務局長に会員動態を、各委員会から何かある場合には、7 月末までに原稿を寄稿する。本日の第 3 回議事録については、なるべく早く作成して、次回のニュースレターに掲載する。李洪章理事から、今大会の参加方法については、Peatix の使い方についても、案内する提案があった。これについては、国際シンポジウムも加えて、ホームページとマーリングリストとも連動して会員に案内することが確認された。

その他

・奨励賞について佐々木会長から報告があった。これまでの議論の経緯をまとめたものを理事会に配付した。奨励賞規程については、最終的に理事の意見を集約したものを添付した。規程の成立が一年間遅れたため、今回だけ受賞対象も一年延ばすということも総会で提案することが確認された。
最後に佐々木会長から、大会までよろしくお願いしたいという締めくくりがあり、閉会。

次回理事会

日程：2022 年 9 月 10 日（土）

III. シンポジウム・ワークショップ報告

①3 月研究実践交流会

JOHA 学会誌次号にて内容を原稿化したものを発表します。

②6 月シンポジウム：語りを一冊に編みあげるまで ：野入直美(2021)『沖縄一奄美の境界変動と人の移動』を手掛かりに

2022 年 6 月 25 日、上記のシンポジウムをハイブリッド形式にて開催した。本シンポジウムでは、野入会員が昨年刊行した『沖縄一奄美の境界変動と人の移動—実業家・重田辰弥の生活史』(2021 年)を中心とし、著者による刊行経緯と意図の解説、そして語り手である重田辰弥氏によるコメント、最後に編集者として、版元であるみづき書林の岡田林太郎氏から編集者として報告をいただいた。これに対して有末賢会員と根本雅也会員のお二人からコメントを得た。

野入氏は、自分が研究者として見出したのは、立志伝中の人物として重田氏を捉えた場合にしばしば見逃されてしまう、「副旋律」としての越境の軌跡であるとした。重田氏の闘病を通じた「生き直し」の過程に伴走する過程で野入氏が感得した、歴史の中に個人を見出す／個人の中に未来を見出す嘗為としてオーラルヒストリーの意義が語られた。聞き取りを本にしてみた後になって、どうしてこのような構

成にしたのかが腑に落ちるという表現は、聞き取りをまとめる際に示唆的である。

多忙の中で参加いただいた重田氏は、本書刊行後、ブラジルからを含め非常に多くの反応があつたことを紹介され、重田氏の目に映った野入氏の行動力を賞賛された。重田氏が「自分を照らしてくれる」存在として研究者を表現しているのに触れ、感銘を受けた。企業人として、また人と人とのつなぎ合わせるネットワーカーとして活動してきた経験に裏打ちされた主張は説得力のあるものだった。

岡田氏からは、本書出版の経緯が、新たな版元を立ち上げる過程と重なっていたことが解説され、本書が組織的な商取引であると同時に属性も帶びるものであることが指摘された。本書の成立に当たっては、聞き手と語り手の親密な間柄に、「ビジネス」を担う「編み手」が関わったことが、本という「かたち」にする際に良く作用した点も指摘された。通常出会うことがない、語り手と編み手が出会ったことも特色とされ、そこから出てくる本書の「著者」について問い合わせ、聞き書きの著者をめぐる古くて新しい問題を想起させるものであった。また、本書についての経験だけでなく、同じく編集に携わる人びとから得た知見も交えて、聞き取りを素材にした書籍の類型として①分析メイン②語りメイン③資料性メインの3つをあげ、本書の個性を指摘された。

有末氏は長いスパンのオーラルヒストリーの蓄積を紹介しつつ本書の特徴を述べ、根本氏は自分自身の単著刊行と学会誌編さんの経験を踏まえつつ、本書で重要な位置をしめるコラムについてもその意義を指摘した。

オンライン参加は最大74名、会場を提供していただいた上智大学での現地参加は15名の合計89名の参加があった。現地では研究者だけでなく、編集者の方の参加もあり、オンラインでも多彩な方の参加が見られた。事前の登録者は120名を超える、このテーマへの関心の高さを感じた。今後、単著を刊行しようと考える若手研究者にも参考になれば、という主催側の意図は、よく準備された報告とコメントによって十分に達成されたと考える。引き続き、オーラルヒストリーの成果をどのようにまとめるのかについて深い対話を続けていく必要がある。その機会を提供いただいた著者と話者、そして編集者の皆様にお礼を申し上げる。(安岡健一)

IV. お知らせ

1. 会員異動（2022年1月21日～2022年7月31日）

・新入会員

宮城 朋世	琉球大学大学院人文社会科学研究科比較地域文化専攻
坂井 華海	熊本大学大学院自然科学教育部工学専攻
佐々木 順二	文教大学教育学部
大瀧 友里奈	一橋大学大学院社会学研究科
中村 有沙	一橋大学社会学部
加藤 英明	南山大学人類学研究所・非常勤研究員
関東 晋慈	毎日新聞・記者
新川 郁実	琉球大学大学院地域共創研究科言語表象プログラム
千葉 直美	東北大学災害科学国際研究所・客員研究員

奈良 雅美	特定非営利活動法人アジア女性自立プロジェクト代表理事
清水 亮	日本学術振興会特別研究員 PD・早稲田大学
川村 潤子	名古屋大学大学院人文学研究科博士後期課程
朱 子奇	東京大学大学院学際情報学府博士課程
村中 大樹	大阪大学大学院文学研究科博士後期課程
奈倉 京子	静岡県立大学国際関係学部・教授
池永 稔子	国立療養所大島青松園 社会交流会館・学芸員

・退会

川崎瑞穂、松田ヒロ子、赤嶺淳、矢野泉、児玉谷レミ、菅野智博、福本晋悟、梶原はづき、山口有梨沙、折井美耶子

※連絡先(住所・電話番号・E-mail アドレス)を変更された場合は事務局までご連絡ください。
(事務局長 佐藤量)

2. 2022 年度（2022 年 4 月 1 日～2023 年 3 月 31 日）会費納入のお願い

平素は学会運営へのご協力、まことにありがとうございます。本学会は会員のみなさまの会費で成り立っております。今年度の会費が未納の方におかれましては、ご入金のほどよろしくお願ひいたします。

会費のご納入につきましては、8月末日までにお願いしたく存じます。学会誌の一斉発送の時期を過ぎますと、ご納入確認がとれた後に、個別に学会誌発送手続きをとらせていただくことになり、事務局の作業負担の増大につながります。ご理解のほどよろしくお願ひいたします。

また、一部ですが、2021 年度・2020 年度分についても未納の会員がいらっしゃいます。こちらも早めの入金をよろしくお願ひいたします。

なお、所属機関名義で振り込まれる場合は、別途、会計宛に入金した旨をご連絡ください。

■年会費

一般会員：5000 円 学生・その他会員：3000 円

*「学生・その他会員」の「その他」には、年収 200 万円以下の方が該当します。区分を変更される場合は、会費納入時に振込票等にその旨明記してください。

*年会費には学会誌代が含まれています。

■ゆうちょ銀行からの振込先

口座名：日本オーラル・ヒストリー学会

口座番号：00150-6-353335

*払込取扱票（ゆうちょ銀行の青色の振込用紙）の通信欄には住所・氏名を忘れずにご記入ください。

*従来と記号・番号は変わりありません。

■ゆうちょ銀行以外の金融機関から振り込む際の口座情報

銀行名：ゆうちょ銀行

金融機関コード：9900

店名：〇一九（ゼロイチキュウ）

店番：019

預金種目：当座

口座番号：0353335

カナ氏名（受取人名）：ニホンオーラルヒストリーガツカイ

郵便振込・口座振込の控えで領収書に代えさせていただきますので、控えは必ず保管してください。必要に応じて個別に領収書も発行させていただきますので、その際はご連絡ください。

その他、学会会計全般についてご質問等ございましたら、会計担当の李 (leehj(at)css.kobegakuin.ac.jp) までお問い合わせください。

（会計 李洪章）

日本オーラル・ヒストリー学会

Japan Oral History Association (JOHA)

JOHAニュースレター第40号

2022年8月10日

編集発行：日本オーラル・ヒストリー学会

JOHA 事務局

〒603-8577 京都市北区等持院北町56-1

立命館大学大学院 先端総合学術研究科 佐藤量 宛

日本オーラル・ヒストリー学会事務局

E-mail : [joha.secretariat\(at\)ml.rikkyo.ac.jp](mailto:joha.secretariat(at)ml.rikkyo.ac.jp)

*郵送またはメールでのご連絡をお願いいたします。
